

オピニオン

論点

新型コロナ

リスクに向き合う

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、感染者数の急増、経済の急激な落ち込み、生活への不安の高まりなど、社会は新たな「リスク」に直面している。だが、そもそも社会には常にさまざまなリスクが存在する。私たちは生きていく上で、自らのリスクをどう判断し、向き合っていくべきなのか。

「緊急事態宣言」7割

感染者増加が続く新型コロナウイルスへの対応を巡っては、国民の間で政府への不信感も高まっている。2月末に安倍晋三首相が「全国一斉休校」を要請した際は、専門家の意見を聞かずに「独断」で表明したとして批判が噴出した。毎日新聞の世論調査によると、今月7日に発令された緊急事態宣言について、7割が「遅すぎる」と回答。収入が大幅に減った世帯に30万円を給付する支援策についても、約半数が「不十分」と答えた。

広瀬 弘忠

東京女子大名誉教授



ひろせ・ひろただ 1942年生まれ。東京大大学院博士課程中退。文学博士。東京大助手、東京女子大教授などを歴任。専門は災害リスク学。著書に「人はなぜ逃げおくれるのか」など。

—鈴木英生撮影

「リスク」という言葉はラテン語から来ており、本来は危険を冒してでも価値のあるものを手に入れるために挑戦するという意味だ。船乗りが危険を承知で冒険に出て財宝を得ようとするイメージで、日本のことわざで言えば「虎穴に入らずんば虎児を得ず」だろう。歴史を振り返ると、人類はリスクをとって未知の分野に踏み込み、文明や科学を歩み進めてきた側面がある。ただ、今回の新型コロナウイルスの大流行では多くの死亡者が出ている。現段階ではマイナスの面ばかりで、「危険」とはほぼ同じ意味でリスクという言葉が使われている。

正確な情報と透明性で

政府は当初、一度しかないはずの「瀬戸際」という言葉を何度も用いて、市民の危機意識を高めて「行動変容」させようとした。しかし、単に恐怖を与えられても人はなかなか行動を変えられない。リスク管理のイロハのイは、正確な情報の公開と透明性の確保だ。方針を発表するときは、データやエビデンス（証拠）を示さなければならぬ。客観的なデータに基づいた説得的なコミュニケーションが必要だが、政府にそれができていないとは言えない。森友学園を巡る文書改ざん問題などの影響で、多くの人が政府に不信感を抱いているのも、リスク管理の面からはマイナスに働いている。新型コロナウイルスに対峙する上で、私たちは国や自治体に対して、正しい情報や政策の根拠となったデータを提供するように求め続けなければならない。またリスクを過剰に感じて、不幸にも感染してしまった人を責めたり排除したりするような風潮をつくってはいけない。それは社会全体のリスクを高め、結局は自らの安全を脅かすことにつながる。今回の問題の収束には年単位の期間が必要になる。我々は新型コロナウイルスのリスクを正しく理解して最小化させながら、毎日の生活を豊かで楽しいものにしていかなければならない。新型コロナウイルスと共存するとは、そういうことだろう。【聞き手 柳葉未来】

大村 詠一

NPO法人日本1DDMネットワーク副理事長

おおむら・えいいち 1986年生まれ。熊本大大学院修了。元エアロビック競技日本代表。1型糖尿病の患者らを支援するNPO法人の副理事長や、日本エアロビック連盟理事を務める。



1型糖尿病は血糖値を下げるインスリンが分泌されなくなる病気だ。私は8歳で発症し、それから27年間、1日数回の血糖値測定とインスリン注射を続けている。この病気と付き合いつつながら、4歳から始めたエアロビックを続け、競技の世界で日本代表になることもできた。病気を抱えながら生きる上で大切なのは、自分に合ったリスクを正しく知り、生活にうまく適合させることだと思っている。1型糖尿病は幼少期に発症するケースが多く、現在の医学では治らない。血糖値のコントロールがうまくいっていない場合、新型コロナウイルスも合わせて、感染症になると重症化しやすいというリスクもある。患者は血糖値を下げるため、注射などで自らインスリンを注入する必要がある。注入しなければ数日で死に至る。一方で、血糖値が下がりすぎると意識を失い、命の危険もある。注入するインスリン量の不足などにより、高血糖状態が長期間続くと、目や腎臓などの合併症につながるリスクが高まる。血糖値の上がりやすさ、高血糖や低血糖の時の症状は人それぞれ違う。私の場合、頭がぼんやりするのは高血糖のサインだが、低血糖でそうなる人も、同じ1型糖尿病患者でも、私と他の患者で

相手知り生活に適合させる

はその兆候が違うので、普段から自分の症状の特徴や体調の変化を細かく把握し、その都度インスリン注入のタイミングなどをコントロールしながら暮らしている。私たちが生きる目的は「病気のリスクを回避することではない。尊敬する知人の受け売りだが印象的な言葉がある。「病気になるって病人になる。適切な治療を受けて患者になる。そして自分の意思を持って病気に向き合うことで生活者になる」。私は患者で終わってはいけない、生活者になりたいと思っている。生活を営み、夢を追いかけたい。そのために、この病気とどう付き合えばやりたいことができるかを常に考えている。流行が続く新型コロナウイルスに対し、私たちは感染しないように気をつけながら、当面は共存していかなければならないだろう。病気と付き合っていくためには、情報発信をしっかりと確認し、正しい情報を得ることも重要だ。また、今回の新型コロナウイルスの流行で外出する機会が減り、生活が大きく変わってしまった人も少なくない。私も発症直後は、1型糖尿病であることを認めたくない思いが強かった。友人に病気を伝えられたのは発症3年後の小学5年生になってからだ。そして、中学生のころに、エアロビックの競技者を目指したいという人生の目標ができて、前に進むことができた。私は1型糖尿病の患者であったからこそ出会えた多くの人がいて、たくさんの刺激や考え方を得た。病気というリスクが、自分の人生のチャンスにつながったという側面がある。新型コロナウイルスのリスクが話題になる今、改めて体調をしっかり管理し、感染の危険がある行動は避け、収束後に備え、普段はできるだけ勉強したい。これまでに比べて、ピンチを少しでもチャンスにつなげたいと思っている。【聞き手 柳葉未来】